

## 第67回埼玉県美術展覧会審査評

### 【第2部 洋画】

審査主任 やまもと こうぞう  
山本 耕造

第67回県展は1,248点の応募があり、厳正な審査の結果530点が入選、入選率は42.5%となりました。昨年度が39.8%でしたので数字から見れば入選が緩くなったように思われがちですが、レベルは非常に高い印象を持ちました。高校生から年配の方まで幅広い年齢層から応募があり、作品の傾向はバラエティーに富んでいます。パワーと感性のみずみずしさに世代の差は全く感じませんでした。

近年、絵画表現のバリエーションが広がってきており、物を見て描く伝統的な具象絵画が中心をなしてはいますが、対象の再現よりもイメージを形にしようと試みている作品が着実に増えてきています。表現媒体も多様で、油彩、アクリル、異なる複数の素材を使ったミクストメディアを自在に使いこなし、洋画＝油彩という概念からの開放を感じます。

入選作品や受賞作品は各々の表現において十分な力量を発揮し、説得力のある画面を構成して見ごたえのある粒ぞろいの作品が揃いました。

残念ながら選外となった作品の中にも、色、形、構成、メッセージ力において、絵としての面白さが感じられる魅力的な作品がたくさんありました。入選作品と紙一重の作品が多かったと思います。来年度の挑戦を期待します。

今回、キャンバスの張りがゆるくて表面がゆらゆらと揺れていたり画面に大きなしわがある作品が意外に多く見受けられ、これらはとても気になりました。そのような画面ではせっかくの作品の魅力がそがれてしまいます。絵を描く以前の問題として注意してください。ピシッと張ったキャンバスに描くと気持ち良いものです。

・埼玉県知事賞

ぎゅうしゃ  
「牛舎にて」

すずき せいいち  
鈴木 精一

かわいい子牛は、眼差しがやさしく、鑑賞者を見つめています。画面からよちよち出てきそうな錯覚を覚えます。モノクロームに近い画面ですが、牛の黒と白のバランスや、表情、牛舎の色が調和し、うまくまとまっています。牛舎の空間がマチエールの工夫で美しく表現されていて、静寂の中に生命力を感じる爽やかな作品になっています。素朴な優しさが伝わってきます。

・埼玉県議会議長賞

じかん うみ  
「時間の海」

ながもと ひでお  
永本 秀男

圧倒的な力強さを感じ、多彩な描き方で見る人の心を引き付け、画面の中に引き込む力のある秀作です。特に全体のマチエールが素晴らしく、描き方も全くの自由で絵具、パステル、チョーク等いろいろで張り物もあり、50号の作品でこれだけの迫力が出せることに感心いたします。ただし、少し多くの物が入りすぎて息苦しさを感じることもあります。空間をもう少し上手に使うことも抽象作品には必ず必要ですので、今後の課題にしていただけたらと思います。

・埼玉県教育委員会教育長賞

「<sup>しき</sup>四季」 <sup>いけだ</sup>池田 <sup>のりこ</sup>祝子

色彩がとても美しい作品です。画面構成もしっかりしていて描写も的確です。蓮池に生息する生物の生態を良く描いています。左隅のサギや、画面の右上のツバメ等の表現にやや難点はありますが、生物への優しさが画面から溢れて出ています。澄んだ色彩が光り、心温まる素敵な絵です。

・埼玉県美術家協会賞

「<sup>ふおるて</sup>forte <sup>に</sup>Ⅱ」 <sup>おおみ</sup>大海 <sup>じゅんこ</sup>順子

コラージュと水彩絵具などを工夫し、有機質な物と無機質な物を同一画面上に対立させて構成を試みた点に共感を覚えます。画面の左隅がやや気になりますが力強い作品です。<sup>ふかん</sup>俯瞰した画面構成でまとめていますが、玉ねぎの描写がやや弱い点が残念に思いました。しかし、マチエールにいろいろと工夫の跡が見られ、油彩に負けない力作だと思います。

・埼玉県美術家協会賞

「<sup>はる</sup>春きらら」 <sup>おか</sup>岡 <sup>あいこ</sup>愛子

ガーデンテラスのテーブルの上に丹精された庭の花を飾り、室内と外の庭の距離感が出ています。花、花瓶、テーブル、椅子などの材質が良く描けていて、画面の構成もしっかりして安定感があります。達者な筆使いはととても丁寧で、対象を良く表現しています。外の光が清々しい空気を運んでくれるような感じのする良い作品です。

・埼玉県美術家協会賞

「<sup>しょうえん</sup>招宴」 <sup>とうじょう</sup>東条 <sup>ゆみ</sup>優美

赤いテーブルクロスの上にはいろいろなビンやグラスが配置されて、やや雑然とした構成の感がありますが、それぞれが一つ一つ繊細に質感も良く描かれています。こんなにたくさんの物を描いているのに嫌味がなく、とても楽しい作品となっています。前面の赤い色面が爽やかで、全体を支配しているのではないのでしょうか。中央の皿の中の白いランプも重要な画面構成の要素となっています。

・埼玉県美術家協会賞

「<sup>ゆうきゆう</sup>悠久の祈り」 <sup>ながえ</sup>永江 <sup>さきこ</sup>咲紀子

磨崖仏がペインディングナイフと筆で作られた荒々しいマチエールの上に、あたかも作者が鑿で彫っていくかのように心のこもった線で描き出されています。古い岩肌にし差し込む光が、仏の顔と印を結んだ手を淡く優しく照らし出して心を和ませてくれます。画面の下方の暗部に色が生のまま残っているのが少し気になりますが、全体としては見事な作品に仕上がっています。

・さいたま市長賞

「<sup>やせい</sup>野生のパワーⅢ」 <sup>たかはし</sup>高橋 <sup>こうこ</sup>よう子

画面中央に、大地に根を張り、力強く生きようとする植物を描いています。作品に激しい動きを感じます。遠景の山並みが空間の広がりや大地の大きさを感じさせています。色にも工夫、変化があり、中間色を見事に使いこなし、好感の持てる良い作品になっています。

・さいたま市議会議長賞

「<sup>こころ</sup>心の<sup>たび</sup>旅」

<sup>おかの</sup>岡野 <sup>きくいち</sup>菊市

蒸気機関車は懐かしい乗り物です。この作者の描いた機関車の姿は堂々とした重量感があります。<sup>たくま</sup>逞しい岩のようで、胴体のマチエールは風雪に耐えて長年働き続けてきた歴史を感じさせます。その胴体には大・中・小のさまざまな機具が備わりそれが軽快なリズムを生み出しています。SLは若い青年の姿に似ていてファンが多いことも承知していますが、作者も旅行をしては数々のSLを描いているのでしょうか。機関車が好きで仕方ないという気持ちが伝わってくるようです。大変に力強い作品で感銘を受けます。

・さいたま市教育委員会教育長賞

「<sup>ゆめじ</sup>夢路『<sup>あすか</sup>明日香』<sup>いしぶたい</sup>石舞台：<sup>よん</sup>四」

<sup>さとう</sup>佐藤 <sup>しんじ</sup>伸二

作者は長くこのような<sup>まんだら</sup>曼荼羅をテーマに描き続け、永遠のテーマだと思われれます。水彩だからこそ出来る精密な描き方で色も多彩で、線にも狂いがなく完璧な作品に仕上がっています。図案的な印象もありますが、現代的絵画として異色作品であり、圧倒的に光っていました。少し細かすぎる感もありますが、作者の狙いは、円の中の石舞台と平面化した空間処理との対比の異質感かもしれません。画面から力強いエネルギーが迫ってきます。

・共同通信社賞

「まなざし」 ねぎし りょうこ  
根岸 亮子

部屋の一隅に、足を崩して横座りしている白と薄いピンクの着衣の女性が、卓越した的確なタッチで軽やかに気持ちよく描かれています。顔や首、上半身の表現は確かなデッサン力が感じられる見事な表現です。影側に描いた紫の髪飾り、白いごく小さな耳飾りや手に持った2色の花などは雰囲気を作るのに効果的で作者のセンスが感じられます。

構成はとてもシンプルで潔さがあり、作者が描きたかったであろう存在感も十分出ています。膝の奥行きを出すと足が長く見え、さらに魅力的な作品になると思います。

・埼玉新聞社賞

「幸福こうふくのとなり」 さかもと りえ  
坂本 理絵

5本の強い線が画面を的確に分割し、構成の強さを感じさせてくれます。庭の光の明るさと室内の暗さのドラマチックな対比が画面に圧倒的な効果をもたらしています。状況描写を超えた心象の世界を表現しているように感じられます。これからも描き続けてくれることを期待しています。

・産経新聞社賞

「かま土どにⅡ」 まつだ きょうこ  
松田 京子

郷愁を感じる古いかまどが、単純化された画面の中に構成されていて、作家が狙いとした斬新な空間を創り出しています。形にこだわらない、鍋、釜にわずかに残る鮮明な赤や、塗り重ね作られたマチエールも美しく、深みのある色彩に透明感を感じます。モノトーンを基調とした作品がより懐かしさを感じさせています。

・テレビ埼玉賞

「さざなみ」

もり かなみ  
森 香那海

「さざなみ」と題した作品ですが、画面は、水面の描写を超えた不可思議な世界を生み出しています。それがとても魅力です。石の配置、水紋の描写が、巧<sup>たく</sup>まずしてアンバランスなバランス、意図を超えた画面の妙味、構成力を生み出しています。それらは、何処から生まれてくるのか。恐らく、描き手の画面に対するひた向きさが生み出したのです。高校生活を終えて、これから先、描写や技術の向上を手に入れても、それだけでは生み出せないものが、ここに在るのです。そのことを忘れずに進んでほしいと深く思わせてくれる作品です。

・毎日新聞社賞

「雨あがる」

あめ きむら のぼる  
木村 昇

不透明水彩を使い達者な筆さばきで手馴れた作品です。特にバックのタッチはリズムカルで爽やかに感じられます。学生らしい若い女性がうす暗くなった雨の日、バス停でバスを待っていると思われる姿の表現は郷愁が漂っています。また、携帯を見ながら立っている様子は現代っ子らしく微笑まじさを感じました。できれば、体の中の影(顔、手、足)に若さを感じられる暖かい色を使うと、もっと若い女性の初々しさが表現できたのではないかと思われました。

・NHKさいたま放送局賞

「木漏れ日」  
こも び おおくぼ かよこ  
大久保 佳代子

冬木立の木漏れ日の中に立つ少年像。爽やかな色彩と的確なデザイン力で、画面全体のバランスを良くとっており、冬の陽光の暖かさを感じさせてくれます。顔の表情と少し出た手、白いシャツと白いズボンと空の白とを上手くつなぎ、画用紙の白を生かしながら、画面を統一し、冬枯れの寂しさを作り上げています。

・埼玉県美術家協会会長賞

「白い残像・3 . 1 1 - B」  
しろ ざんぞう さんてん いちいちのびー こざくら きょうこ  
小櫻 京子

一見、淡く見える画面に、静かな強い存在感が満ちています。その存在感が遠景、中景、前景の全てに、適格なフォルムを与えています。描写の過不足感もなく、押すべきところを押し、広げるべきところを広げ、構成の妙も備えた作品となっています。画面中央にある縦型の白い細い風船状の形態に対して、異界の空とも見えるニュアンスに富んだ空間が、さらに生気を与える効果を発揮しています。中景の生命体とも見える、横に伸びた山状のフォルムが、画面の拠り所となって、画面世界を支えています。これらが在るからこそ、前景の、一見ザックリした描写が、実は繊細で的確であることを成立させ、静かでありながら、強い意志と存在感に満ちた作品として、この絵に強いリアリティを与えています。



・高田誠記念賞

ぞうきばやし  
「雑木林」

もり ただお  
森 忠郎

雑木林を奥において、前面から林まで畑が続き、道が中央に十字に走り、爽快で雄大な広さを感じさせる秀作です。筆の使い方、色の使い方が少し荒いようなところも見受けられますが、それが絵に張りや勢いを与え、林の描き方との調和を上手に使って、雄大な風景画となっています。手前左側に木を二本描き入れて、距離感を出し、さらに道が手前から奥まで貫き、大地の広がりを感じさせています。また、右中央奥に小さな物置小屋を入れたこともよく計算されていて、手馴れた腕前の作家だと思われま

す。